

おこっぺがわ  
興部川水系河川整備基本方針

平成 1 4 年 3 月

北 海 道

# 興部川河川整備基本方針

## 目 次

1．河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	1
(1)流域及び河川の概要	1
(2)河川の総合的な保全と利用に関する基本方針	4
2．河川の整備の基本となるべき事項	6
(1)基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項	6
(2)主要な地点における計画高水流量に関する事項	6
(3)主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項	7
(4)主要な地点における流水の正常な機能を維持するため 必要な流量に関する事項	7
(参考図)	
興部川水系流域概要図	8

## 1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

### (1) 流域および河川の概要

興部川は、興部町、西興部村の境界に位置するホロヌプリ岳の北方標高 870m 付近に源を發し、南流した後上興部地区で東に転じ、札滑川、忍路子川、ペンケ川等の支川を合わせて西興部村を貫流し興部町に入り、さらに班溪川、宇津川等の支川を合わせて、興部町市街地でオホーツク海に注ぐ、流域面積 308.3km<sup>2</sup>、幹川流路延長 53.6km の二級河川である。

河川の名前は、一説によると、アイヌ語のオウコッペに由来し「川尻の合流しているところ」の意であり、かつて興部川と藻興部川が河口付近で合流しオホーツク海に注いでいたことから、このように呼んだものと言われている。

流域は興部町と西興部村にまたがり、その土地利用状況は約 9 割が山地を占め、針広混交林を主とする天然林や人工林などの森林資源に恵まれており、公有林や私有林として森林経営が行われている。川沿いの平坦地では、主に畑地と牧草地として利用されている。上流部では西興部村市街地や、上興部地区などの集落が形成され、中下流部では宇津地区、興部町などの集落や市街地が広がり、両町における社会・経済の基盤をなしている。

また、国道 238 号線が海岸沿いに走り、興部町市街地の中心部で国道 239 号線が分かれ、興部川に沿って西興部村や上川管内の主要都市である名寄市に通じている。興部町は大正期のはじめから交通上の要路として発展し、諸官庁の出先機関や公共施設が多く、その大部分が興部町市街地に集中していることから、本水系の治水・環境・利水についての意義は極めて大きい。

興部川流域の気候は、年間を通しておおむね冷涼で、年平均気温は興部町で約 5.5、西興部村では約 5.3 である。冬には海岸に流氷が押し寄せ低温になり、5 月頃にはフェーン現象による高温と乾燥に見舞われ、夏には 30 を越える日もあるが濃霧が発生し低温が続く。年平均降水量は西興部村で約 1300mm と北海道では平均的で、興部町では約 950mm と比較的少ない。

流域の地質は、先第三紀層、新第三紀層、第四紀層に分けられ、上流の西興部村では、先第三紀層の西興部層となり礫岩、砂岩、粘板岩などからなっている。宇津地区付近は、かなり軟弱な新第三期の宇津層で、礫岩、砂岩、泥岩などからなっている。興部川をとりまく山地は、河川をはさんで丘陵帯がオホーツク沿岸までつらなっている。

緑豊かな河畔林に覆われ、流れ下る水音も心地よい上流部は、河岸から背後の山地にかけて、ミズナラやトドマツなどの針広混交林が広がり、その豊かな森林環境を反映してヒグマ、エゾシカなどのほ乳類や、ウグイス、コゲラ、ハリオアマツバメなどの森林性の鳥類が生息している。河道は大きな礫や岩盤が露出した部分が多く、清冷な流れはその間を白泡を飛ばしながら階段状に流れ下り、瀬や淵を連続的に形成している。その流れの中には、清流にすむイワナやヤマメなどの魚類が生息している。

上流部の流れは、清冷で淡水魚飼養に適しており、西興部村では、ニジマスやヤマメなどが養殖されており、村の産業の一翼を担っている。

また、最上流域には赤岩の滝や行者の滝などの自然景観に恵まれており、特に行者の滝は毎年例祭が催されるなど観光の名所にもなっており、多くの人々が訪れている。

多くの支川を集め、やや開放的な流れとなる中流部は、草地を主体とした農地を流下している。ヤナギ類をはじめとした豊かな河畔林は、ミズナラやシラカンバなどの広葉樹林が広がる背後の山地に続いている。アカゲラなどのキツツキ類が営巣地として河畔林を利用しており、河岸にはカワセミの営巣に適した土壁が多く、毎年繁殖を繰り返している。また、「春の女神」と呼ばれ早春を代表する蝶のヒメギフチョウが生息しており、食草となるオクエゾサイシンの群落が河岸に点在している。

この区間は蛇行を繰り返す流れとなり、川底が見えないほどの深淵では、産卵を控えたサクラマスや、ニジマス、エゾウグイ等が生息しており、淵に続く瀬では、大小さまざまな礫の影に、カンキョウカジカやフクドジョウ等が生息し、川底にはカワシンジュガイ群生も見られる。砂州や中州の水際には、クサヨシなどの抽水植物が生育し、トミヨなどのトゲウオ類の良好な生息空間となっている。旧河道の窪地の水たまりは、エゾサンショウウオの産卵場となっている。浅瀬には豊かな魚類を狙って、アオサギが頻繁に飛来している。

二興橋付近を扇頂部とした扇状地となっている下流部は、河川沿いの牧草地や住宅地としての土地利用はいっそう進み、興部町市街地を貫流している。この区間は、かつて河川改修工事が行われており、比較的直線的な浅くゆっくりとした流れとなっている。河岸にはネコヤナギや、タチヤナギなどヤナギ類を主体とした河畔林が発達しており、キジバト、シジュウカラなどの森林性の鳥類が利用している。また、堤防にはさまれた高水敷にはク

サフジ、オオイタドリなどにより草地となっており、カワラヒワなどが見られる。河道内には、土砂の堆積により中州や寄州が発達しており、その水際にはクサヨシ等の抽水植物が繁茂しており、イソシギなどに営巣地として利用されている。また、オオセグロカモメ、キセキレイなどが採餌場として利用している。

流れは直線的で、瀬や淵があまりはっきりしない変化の少ない流れであるが、夏から秋にかけてはカラフトマスやサケが遡上し、ウグイなども生息している。

興部町市街地では、高水敷を利用したパークゴルフ場やゲートボール場、興部公園には散策路などが整備され、地域住民の憩いの場となっており、休日には多くの人でにぎわっている。

また、中上流域ではヤマメやニジマスを狙って、魚釣りを楽しむ釣り人の姿が多い。

興部川の治水については、興部川は蛇行が著しく、入植の始めから春の融雪期、夏から秋にかけての台風期に毎年のように氾濫を繰り返し、農業に与えた被害は甚大なものであった。このため、部分的に護岸、堤防による河川改修を行ってきたが、その後も洪水が頻発し、特に、昭和 30 年は 3 度にわたる出水で、床上浸水 18 戸、床下浸水 43 戸など甚大な被害をもたらした。このため、昭和 37 年より、河川改修に着手し、河口から約 8km 地点までの区間で完了している。

本川上流部では、昭和 48 年の豪雨による増水で河岸決壊などの被害が発生したことから、同年より 50 年にかけて約 1.8km の区間で河川改修が行われている。

また、土砂災害の防止を図るために、主に札滑川上流部では昭和 41 年から平成 3 年にかけて、宇津川上流部においては昭和 58 年より砂防工事が行われている。

近年では、平成 10 年に興部川と支川宇津川の氾濫により、宇津地区の床下浸水 23 戸、床上浸水 15 戸を含め、興部町市街地から宇津地区にかけ床下浸水 56 戸、床上浸水 26 戸などの被害をもたらした。宇津川においては、同年の氾濫被害を契機に再度災害防止のため、興部町において河川改修に着手している。

興部川の水利用は、西興部村においては主に上水道や養魚用水として、興部町においては主に乳製品の工業用水や上水道用水として利用されているなど、流域町村の生活基盤として極めて密接に関わっている。また、沿岸漁業の主な対象であるカラフトマス資源を確

保するために、興部川はカラフトマス放流河川となっており、稚魚の放流を4月中旬～5月下旬まで行っている。また、宇津川合流点～ペンケ川の合流点に至る本川、およびペンケ川本支川では資源保護水面に指定され、例年5月1日から12月31日までの期間はヤマメ採捕禁止となっている。

水質については、興部川は生活環境の保全に関する環境基準が3区間で設定されている。三興橋上流の水道水取水施設から河口までの下流域はB類型、その上流忍路子川合流点までの中流域はA類型、それより上流域ではAA類型に指定されている。平成2年から平成11年までの観測データでは、各地点のBOD75%値は基準値を満足している。

## (2)河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

河川の総合的な保全と利用に関する基本方針としては、水害の発生状況、治水事業の経緯、河川の利用状況ならびに河川環境を考慮するとともに、既存の利水施設等の機能の維持に十分配慮して、水源から河口まで一貫した計画のもとに、次のとおりとする。

災害の発生の防止または軽減に関しては、興部川流域の社会・経済的な重要度と道内の他河川とのバランスを図りつつ、興部町・西興部村の沿川地域を防御するため、堤防の新設や河道の掘削等により河積を増大させ、計画規模の降雨による洪水の安全な流下を図るものとする。

整備途中段階における施設能力以上の洪水や、計画規模を上回るような洪水に対しては、水防管理者などの関係機関に対し、河川情報などの伝達体制の整備やハザードマップ作成の支援等を行い、被害の軽減を図る。

河川の適正な利用、流水の正常な機能の維持に関しては、河川の利用状況や水量・水質の把握を継続しながら、利水者や関係機関との連携を図り、適正かつ合理的な水利用がなされるよう努めるとともに、水質保全などの河川愛護に関する啓発に努める等、現在の安定した水利用や良好な水環境が維持されるよう努めるものとする。

河川環境の整備と保全に関しては、サクラマスやカンキョウカジカ等の魚類の生息空間となっている深淵や瀬、アカゲラ等の鳥類の営巣・生息場所となっている河畔林、ヒメギフチョウの食草となるオクエゾサイシンが生える河岸の植生、カワセミの営巣する河岸の

崖地、エゾサンショウウオ等の両生類の産卵場所となっている旧河道部分、など良好な動植物の生息・生育環境に配慮し、適切な保全措置を行う。また、パークゴルフ場や魚釣りなどによる河川利用の現状を踏まえ、地域住民と河川との豊かなふれあいの場の保全を図るものとする。

河川改修の実施にあたっては、地域の意見も踏まえつつ、治水上支障のない限り河畔林や現河床を保全することなど、治水と環境が調和した、後世に残すべき良好な河川環境となるよう考慮する。

河川の維持管理については、災害発生の防止、河川の適正な利用、河川管理施設の維持、流水の正常な機能の維持及び河川環境の整備と保全など総合的な観点から、適切な実施に努めるものとする。また、河畔林については、治水上および環境上の機能や影響を考慮した上で、適正な管理を行うものとする。

以上の実施にあたっては、地域住民や各分野の専門家の意見を踏まえながら、河川の総合的な保全と利用に努めるものとする。

## 2. 河川の整備の基本となるべき事項

### (1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への配分に関する事項

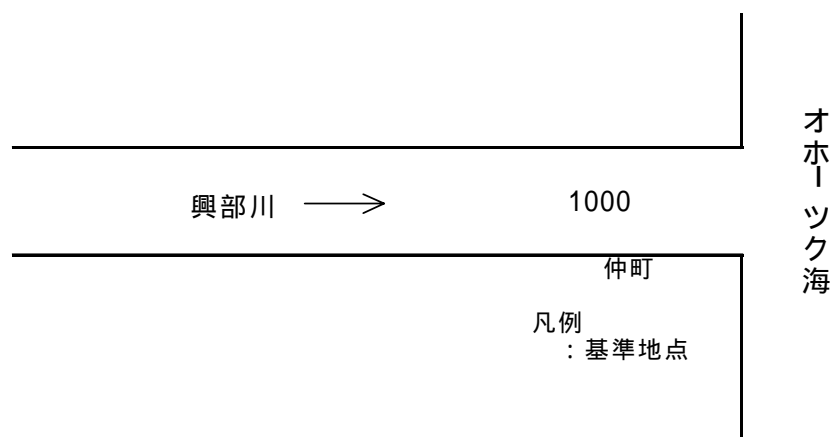
基本高水のピーク流量は、道内他河川との整合を図りつつ、平成10年9月程度の降雨で発生する規模の洪水を考慮して、仲町基準地点において1000m<sup>3</sup>/sとする。

基本高水のピーク流量一覧表

河川名	基準地点	基本高水のピーク流量 (m <sup>3</sup> /s)	洪水調整施設による調節流量	河道への配分流量 (m <sup>3</sup> /s)
興部川	仲町	1000	-	1000

### (2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項

興部川における計画高水流量は仲町基準地点において1000m<sup>3</sup>/sとする。



計画高水流量配分図 (m<sup>3</sup>/s)



(3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形に係る川幅に関する事項

本水系の主要な地点における、計画高水位及び概ねの川幅は次表の通りとする。

主要な地点における計画高水位

河川名	地点名	河口からの距離 (km)	計画高水位 T.P. (m)	川 幅 (m)
興部川	仲 町	1.78	+6.81	150

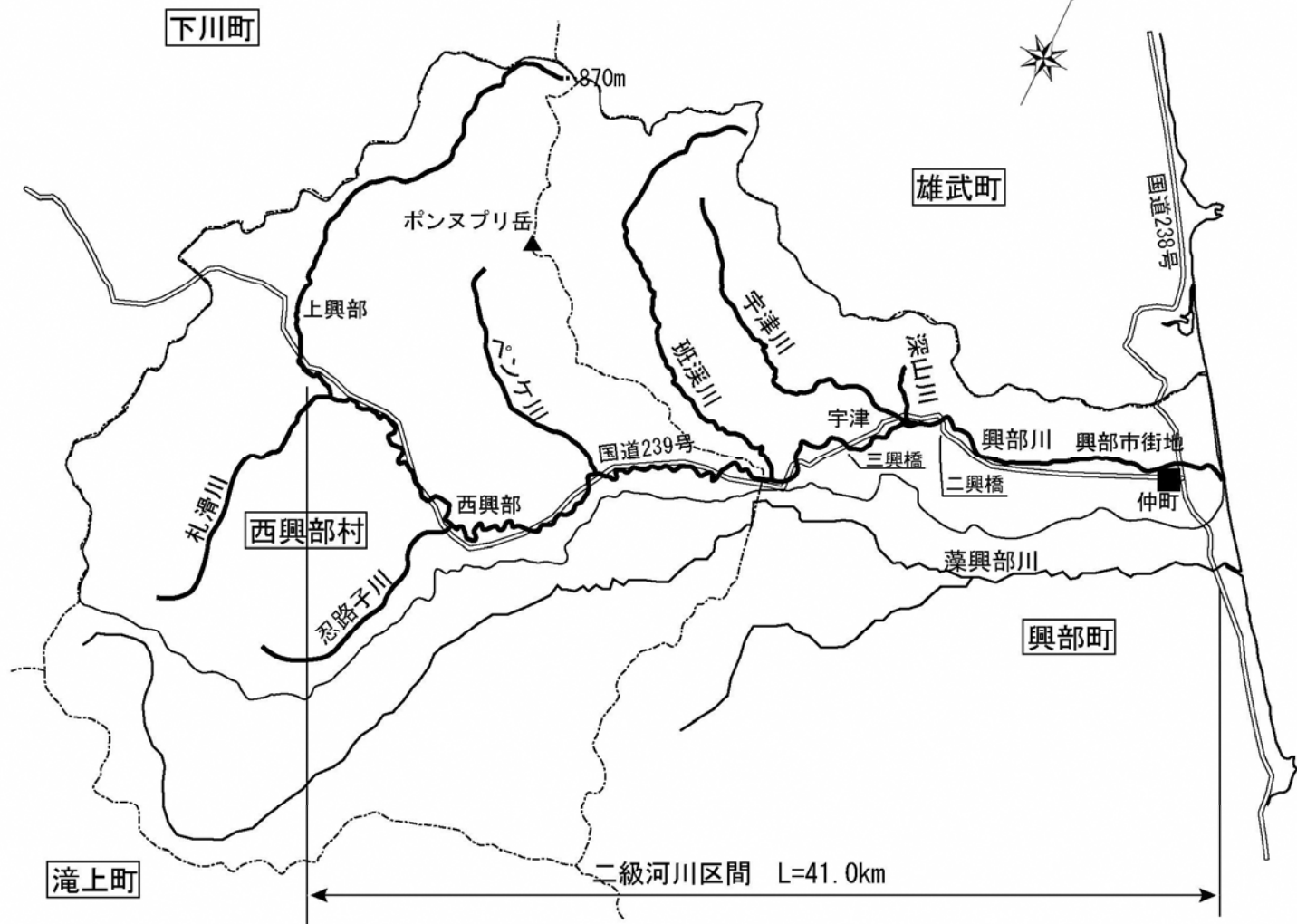
(注) T.P. : 東京湾中等潮位

(4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持するため必要な流量に関する事項

興部川の仲町地点より下流の利水としては、養魚用水として約  $0.03\text{m}^3/\text{s}$  の許可水利がある。これに対して、興部流量観測所（仲町基準地点）における過去 10 年間（平成 2 年～平成 11 年）の平均湯水流量は  $1.48\text{m}^3/\text{s}$ 、平均低水流量は  $3.58\text{m}^3/\text{s}$  である。

興部川における流水の正常な機能を維持するために必要な流量については、今後、流況等の調査を引き続き行い、利水の現況、動植物の保護、流水の清潔の保持などを考慮して定めるものとする。

# 興部川流域概要図



オホーツク海

- 凡例
- : 流域界
  - - - : 行政界
  - : 基準点

